

シャチの魅力

これは、代々、人々を恐れさせると同時に魅了してきた海洋捕食動物の物語です。アイスランドのシャチの個体群調査がなぜこれほど重要なのか。その答えを見つけてください。

— アリックス・モリス —

海のオオカミ

アイスランドの南に浮かぶ群島、ヴェストマン諸島の沖合で、巨大な黒い背びれが波を切り裂いていく。2頭め、そして3頭め。潮の噴水が空中に吹き上がり、海面下では、「blackfish」(ネイティブアメリカンの言葉でシャチの意味)が互いに声を掛け合っている。彼らのリズムカルな鳴き声には歌声とカチッというクリック音が混じり合い、群れ特有の言葉で話し合う。これが“海のオオカミ”と呼ばれるシャチの家族です。

シャチは昔から、私たちをとりこにし、恐れを抱かせると同時に魅了してきました。人間があらゆる手を尽くしてシャチをコントロールしようとしても、生来の野生を手なずけるのは不可能であることを彼らは何度も証明してきました。

2016年3月、米フロリダ州オーランドの水族館「シーワールド」は、調教したシャチのショーを永久に止めることを誓いました。それは、動物権利擁護団体からの高まる圧力に加え、2010年に世間の注目を浴びた、女性調教師がショーの最中にシャチに襲われ亡くなるという恐ろしい事故が起きた末のことでした。そして、つい先月、カリフォルニア州はシャチの繁殖及び飼育プログラムを禁止する法律を承認しました。

アイスランド・ヴェストマン諸島沖で水面に顔を出すシャチ(写真キャプション)

あなたが自然界のシャチの生息地で、“Killer Whale”ことシャチ(実際はクジラではなく世界最大のイルカ)に出会い、研究者たちがシャチや彼らが直面している脅威をもっと良く理解するのを手助けできる世界を思い描いてください。2017年、ヴェストマン諸島で、フィリパ・サマラ博士を含むアースウォッチの研究者たちは新たに企画された調査プロジェクト、“アイスランドのシャチとその獲物”の最後の予備調査を完了しました。

自然界でシャチの群れに初めて遭遇する瞬間のために、準備できることなどありません。しかし、アースウォッチボランティアにとって、その瞬間は単にこの威厳のある生き物の証言者となったこと以上の価値があります。それは、幾世代にも渡って、我々の心をとりにしてきた生物種を理解し、保護することにつながるのですから。

あなたは、この物語の中で、シャチと人間に関する極めてまれで、時に悲惨な歴史を学び、そしてアイスランドにおけるシャチの調査がこれほど重要である理由を見つけるでしょう。

沿岸海域でヴェストマン諸島周辺に生息するシャチの調査をするアイスランド・オルカプロジェクト調査隊。(写真キャプション)

人がシャチを恐れる要因

20世紀半ば、大西洋の北東部(アイスランドとノルウェイ沖合)のニシンの個体数は、主にその海域での乱獲が原因で激減しました。このニシンの減少によって、アイスランドの水産業は壊滅の瀬戸際まで追い込まれました。当時、シャチがニシンを捕食し、漁師の網を破るという報告があり、シャチの群れと漁師たちとの間で争いが起きていました。漁師たちは、アイスランド経済の成長と繁栄を支える重要な源である水産業にシャチが甚大な脅威をもたらすと信じていました。

1954年初頭、この危機的状況に対処するため、アイスランド政府は米国に協力を要請しました。数ヶ月後、タイム誌は米海軍がアイスランド沖で「獰猛な、海の共食い動物」の群れを攻撃したと報道しました。その攻撃によって100頭を超えるシャチが死にました。

「…米海軍の一部隊が、4隻の小型ボートに分かれて乗り込み、ある朝、100頭から成るシャチの群れを消し去った…」-タイム誌、1954年4月号

タイム誌の記事を読んだカンザス州出身の若い詩人、マイケル・マックルアーは心を動かされました。1年後、サンフランシスコで行われた詩の公開朗読会(これが後に“ビートムーブメント”(1950~60年代にアメリカで起こった社会と文学の運動)の誕生と考えられている)で、マックルアーは詩“100頭のシャチの死に捧ぐ”を朗読したのです。目前の聴衆の中には、ニール・キャサディ、ジャック・ケルアック、アレン・ギンズバーグといったビートムーブメントの中心的詩人たちもいました。結びの一節の中で、彼はこう朗読しました。

海には教会がない

神聖さもない

聖書の一節も十字架もない

海岸が動物たちの血で染まった時から

しかし、世間の激しい抗議にも関わらず、1956年12月、海軍発行の公報誌では、この作戦が続行されることが報じられました。記事には、アイスランド近海からの「最悪の海洋生物」を駆逐したことで、アイスランド政府は対外貿易の公約を履行することが可能になったと書いてあります。

1956年12月発行の米海軍の公報誌。アイスランド沿岸沖でのシャチの群れに対する攻撃について記されている。

今日では、ニシン資源はアイスランド政府によって綿密に管理され、ニシンの捕食者であるシャチの群れとニシンで生計を立てる漁業従事者たちの中で争いはほとんどありません。

野生を飼い慣らす

1961年11月、カリフォルニア州ロサンゼルス近郊にある海洋公園、太平洋マリランドの研究者たちは、ニューポートハーバーで、一頭のオルカ(シャチの別名)がすぐ近くで餌を食べているのを発見しました。海洋公園のチームは、何時間もシャチを捕獲しようと奮闘し、最終的には網を絡ませて捕まえました。この雌のシャチはパークの水槽に移され、飼育下にあるシャチ第一号となりました。2日後、彼女は死にました。

しかしこの捕獲作戦が成功したことで、以後、人間の娯楽のために、シャチを集めて調教する動きが始まりました。ほぼ10年間、何百頭ものシャチが、太平洋に面したワシントン州やカナダのブリティッシュコロンビア州の沖合で捕獲されました。そしてその大部分はシーワールドに輸送されたのです。

1976年、ワシントン州知事ダン・エヴァンスの補佐、ラルフ・ムンローは、ワシントン州北西部のピュージェット湾で船を走らせていました。その時、船からほんの100ヤード(約90m)離れたところで、シーワールドの捕獲者たちが、今まさにシャチを捕獲しているところを目撃しました。彼は捕獲者たちがシャチを網の中へ集めて追い込むために、航空機や火薬を使っているのを見て、これはシャチ捕獲許可書条項に完全に違反していると確信しました。ムンローは自分が目撃したことを州知事に伝え、ワシントン州はシーワールドを告訴しました。その結果、和解条項に従ってシャチは解放され、シーワールドはワシントン州海域でのオルカの捕獲許可を放棄することを命じられました。その結果、シーワールドの主要な捕獲場所は公式に立ち入り禁止区域となりました。すると海洋公園の捕獲者たちは、次はアイスランドへと向かったのです。

ウィリーの解放～悲劇と勝利のハリウッドスター～

1993年、12歳の少年の勇気のある行動のおかげで野生に返された囚われたシャチの物語が映画化され、世界中の観客が夢中になりました。その映画「フリー・ウィリー」のラストシーンで、ウィリー(本当の名前はケイコ。日本語で「恵まれた人」の意味)は自由に向かって防波堤の上を飛び越えました。マイケル・ジャクソンの“Will You Be There”のメロディに乗って。

しかしこのシャチの本当の物語は、はるかに複雑で、我々が想像したハリウツド的結末とは程遠いものでした。1979年に、アイスランド沖で捕獲されたケイコは、海洋公園のわずか水深12フィートの浅い水槽で、何年間も閉じ込められていました。映画の公開後、ケイコはメキシコシティの、現在はシックス・フラッグス(米国の遊園地)となっている場所に戻されてから、健康状態が悪化し始めました。しかしその後何年間も、「ケイコを野生に戻せ」という社会的圧力を受け続けた結果、1998年に、ケイコはアイスランドへと輸送されました。そこで野生で生き抜くための様々な訓練を受け、独力で狩りをする方法は学びましたが、ケイコは二度と群れには戻りませんでした。そして、ケイコはノルウェイ沖で正式に野生に戻されてから、およそ1年後に死にました。20年以上もの間、人間はケイコを支配し、その存在の全てをコントロールしてきました。しかし結局、ケイコに野生のシャチになる方法を教えることはできなかったのです。

アイスランド・ヴェストマン諸島でのケイコの解放に注目が集まったおかげで、この地域と、その類いまれなシャチの個体群にも、スポットライトが当たるようになりました。その時点では、オルカの行動に関するデータは極めて限られていて、群れの大きさについては全く判っていなかったのです。この生き物を保護し、彼らが直面する脅威を理解するには、さらなる調査が必要なのは明らかでした。

思いがけない訪問者

それは、“アイスランドのオルカプロジェクト”のフィリパ・サマラ博士とそのチームにとって、ヴェストマン諸島での夏の調査シーズンが始まった時でした。(この調査は博士がセント・アンドリュース大学における博士課程の一環として、2007年に始めた調査プロジェクトでした)。

毎日、研究者たちはヴェストマン諸島で最も大きなヘイマエイ島の最高地点に登って、シャチを探しました。その後、天気が良くて海が穏やかだったら、小さなゾディアックボートに乗り込み、調査を続けました。そしてオルカの個体を見つけるとすぐに写真撮影をし、その行動を記録しました。これらの情報は、後でより多くのシャチ目撃情報を集めたより大きなデータベースに加えられました。これらの調査活動は、アイスランドのシャチの群れに関する知識を深め、保護することを目的とした、もっと大規模な調査の一環でした。

フィリパと彼女のチームは、個々のシャチを、ひれの模様や体色のパターンで見分けることができました。その中の何頭かには、ハンピーやホワイトパッチなどのニックネームをつけることさえありました。しかしある日、フィリパは、とても目立つ模様があるのにも関わらず、見慣れないシャチに出会いました。その夜、彼女はアイスランドで知られている全てのシャチの記録を検索しました。そして全く同じ模様で同じ色合いの、そっくりな一頭を見つけた時、彼女は感動で震えました。しかしその日付を見た時、衝撃を受けました。通常、多くの場所で、シャチの個体が1年か2年姿を消し

た場合、研究者たちはその個体は死んだと推定します。しかし、その日早朝に見つけたシャチは、20年以上も目撃されていなかったにもかかわらず、明らかに非常に元気だったのです。

フィリパ・サマラ博士。アースウォッチの研究者でアイスランド・オルカプロジェクトの主任研究員
(写真のキャプション)

「この出来事で、シャチの群れについて私たちが持っている知識がいかに乏しく、彼らの群れを理解するには長期にわたる観察がどれほど重要かを痛感しました」とフィリパ・サマラ博士は語りました。

捕食者を理解するには、その獲物を研究すべし

地球規模でシャチの個体数を見積もると、この生物種はうまく生き延びていることがわかります。しかし多くの研究者が、シャチは各々の個体群が独特な食習慣やコミュニケーション手段、社会集団を持っているのだから、異なる群れごとに別個の種として扱うべきだと主張しています。また、アイスランドでのシャチの個体数がほとんど解明されていないのは、これまでシャチを観察する長期間調査が実施されていなかったことが一因だと考えられています。

“シャチとその獲物”プロジェクトは、シャチの健康全般や生存状況の指標として、シャチの食物を調査する初めての長期調査です。シャチが餌として選ぶ獲物の種類を調べることで、生活の重要な側面、社会集団を作る方法やコミュニケーション手段などを解き明かすことができます。

研究者たちは、特にアイスランドのシャチの群れはニシンのような特定の餌に依存しているのかという点が解明されることに興味を持っています。ヴェストマン諸島はニシンの産卵場所であり、だからこそ夏の数ヶ月間、シャチはこの島々に引きつけられるのです。シャチが食糧資源をもっぱらニシンに依存しているかどうかを判れば、研究者たちがシャチ種に対する潜在的脅威を知る助けとなり、より良いシャチの保護を推進することができます。

ゾディアックボートの上からシャチを観察し記録する、アイスランド・オルカプロジェクト調査隊

“こういうわけで、我々は今ここにいます。この魅力的な生き物をもっと良く理解するために。そして、彼らの生き様、行動、直面している脅威についても、もっと理解を深めるために”-フィリパ・サマラ博士

調査に参加してください

ヴェストマン諸島の上空を、ウミガラス、カツオドリ、ミツユビカモメ、アイスランドカモメ、ツノメドリが

群れをなして飛んでいます。目の前の海では、ゴンドウクジラやミンククジラ、ザトウクジラが波を切って泳いでいます。この島を形成する火山性の溶岩原の真ん中で、双眼鏡に目を凝らし、おなじみの黒いひれが海面に浮かび上がるのを見つけるまで、沿岸水域をくまなく調査してください。

シャチと人間との間にあった歴史は、論争や、時には犯罪行為によって台無しになってしまったかもしれません。しかし現在、そして未来の歴史は私たちが作っていくのです。

我々の活動に寄付をお願いします

この物語について、何かご意見・ご質問があれば communications@earthwatch.orgまでご連絡ください。ご感想をお待ちしています！